宮古馬のルーツを探る（続）
－南島の飾り馬・江戸献上馬・冊封使の乗馬と毛色－

長濱　幸男（宮古島市総合博物館協議会委員）

はじめに

宮古島市総合博物館紀要第 16 号に掲載した「宮古馬のルーツを探る」（筆者）では、宮古島、八重山諸島、沖縄本島、奄美諸島の遺跡から出土した馬歯骨 90 点を調査し、四肢骨からは体高を推定、歯からは年齢を推定した。その結果、グスク時代の宮古馬や琉球在来馬の体型を浮き彫りにすることができた。グスク時代の馬と現在の在来馬を比較することで、「島嶼化現象（小型化）」を裏付けることができた。また、琉球から明国に献上された貢馬の実態も探ってみた。1374 年から 1680 年までの 307 年間に、明国が琉球から購入した馬は 1,023 頭で、献上馬は 7,878 頭にも達していた。明国への貢馬は、現在宮古島市総合博物館に展示されている「太平号」（剥製）のような馬である。明国への貢馬に宮古馬も含まれた可能性を示すことができた。

渡来経路については、対州馬が博多発長崎、奄美（喜界島）経由で沖縄本島・宮古島に渡来したことを、遺伝学や考古学、そして民俗学的立場から解明することができた。時期的には沖縄本島への渡来が 11 世紀後半から 12 世紀前半、宮古島へは 14 世紀と推定することができた。

本稿では、飾り馬をモチーフとした南島歌謡を奄美諸島、沖縄本島、宮古島、八重山諸島と比較し、馬と古代的な社会を反映したウタはどの地域なのか考察した。また、宮古馬が江戸献上馬として取り扱われた実態を調査した。冊封使の送迎用の乗馬には、宮古馬が数多く含まれていると考えられる。冊封使関係の史資料をもとに、その当時の馬の体格や性格、毛色を明らかにし、現在の在来馬と比較して変化を調べてみた。なお本稿で琉球馬と称しているのは、宮古馬や与那国馬、沖縄本島の在来馬など琉球列島に存在した在来馬のことである。

1　南島の飾り馬

南島歌謡の馬による叙事表現については、島村（1992）の優れた研究論文「琉球弧のウタにあらわれた＜巡行叙事＞表現」がある。オモロの「うちいてはおしかけふし」や奄美大島の「のりがみのオモリ」等を詳しく解説し、宮古・八重山地域のウタとの比較を試みている。

ここでは飾り馬を取り上げた南島歌謡について、誰が、どんな馬に乗って、何をしたのかという３つにしぼって比較検討し、どの地域が古代的な社会を謡っているか考察してみた。宮古伊良部島の「ピャーズ御嶽」の説話に、神の使いとして赤馬がでてくる（山下 2003）が、赤馬は飾り馬ではない。ここでは、飾り馬をモチーフとしたウタを基に比較した。奄美大島、沖縄本島、宮古島、八重山諸島の飾り馬のウタから、宮古馬の渡来時期やルートを探求したいからである。長い歌詞なので、係わりのある部分だけ取り上げた。

1−1　宮古島の飾り馬とウタ

宮古島の古い歌謡に、「東川根盛加越」というウタがある（外間・新里 1978）。東川根盛加越は平良市街地の史跡「盛加がー」の一帯である。ここの按司は「盛加越与那覇よ、与那覇勢頭豊見親よ」と神歌（稲村 1972）に残されているから、1390 年に中山朝貢した与那覇勢頭の若かりし頃のウタではなかろうか。地元では見あたらず、遠く離れた池間島（外間・新里 1978）と下地与那覇（下地町 1969 町政 20 周年記念誌）、多良間村（多良間村 1989）で採取されている。ここでは、池間島で採取された歌詞をとりあげてみたい。

事例 1 東川根盛加越（池間島）

1	あがいがに　むいかぐシみゅーはジ	東川根盛加越　ミューハジ（御大按司）
8	ならぬーまや くかるぎーや　いだひー	自分の乗馬を　栗毛（馬）を出して
9	はんチふらゆコに まーりゃーノョひー	自分で作った鞍を横に　まわして載せて
10	あかちゅなー　シみちゅなーや じゅぎゃきゃーしー	赤ちで染めた（朱色に染めた）綱を しりがい（鞦）にかけて
11	ぬぬはるび いちゅはるびゃーしみ	布の腹帯を　糸の腹帯をしめて
12	チだくーちゃーくがにふちゃーかまひー	立派な轡（くつわ）を　黄金轡を（口に）かまして
13	しーふらんがまんな てぃだのかた　てぃらひー	後の鞍（後輪）には 太陽の型を照らし（飾り）
14	まいふらんがまんな オチチぬかた　てぃらひー	前の鞍（前輪）には お月の型を照らし
15	ならがのーりー　さジが　のーりー	自分が乗って　佐事が乗って走らしたら
22	あぱらぎたーや　やんみゃー たてぃ　とぅびゃい	美女達が８名くらい 立って　出会った
23	いじゃんかいが　ジまんかいがびきりゃ	いずこへですか　どちらへですか　男よ
24	んきゃどぅりゃぬ　いーじゅーにぬ かたんどぅゆ	荷川取の西磯の 方にだよ
25	あやぐにーぬ シまとぅゆきーいじゅりば	アヤグ根が　島騒動するほど出でいるので
27	うりゆみーいで あやぐみいで　ぶなりゃ	これを見に　アヤグを見にだよ　女よ
28	あやぐにーや んみゃ　なまりーにゃーん	アヤグ根は　終わってしまった
34	ばんがやーぬ まじょオがみ　みゅーふり	私（美女）の家の真門まで見送っておくれ
37	っヴぁひゃりよー　ばやひらでぃぶなりゃ	貴女は帰りなさい　自分は家に戻るよ女よ
41	チむやにゃーん　んみやにゃーんびきりゃ	心はない　胸（情け）はない　男よ
43	きゅーがゆーや ばんとぅやシみ びきりゃ	今日の夜は　私と休め　男よ

事例１の「東川根盛加越」は 71 番まで続く。大勢の人たちが声を合わせて歌い踊るクイチ

ャー・アーグであり、楽しく面白く謡われている。このウタでは、馬の飾り立てが半端でない。その当時は、面繋(おもがい)で馬を制御したと考えられが、ウタでは金の轡(くつわ)が取り付けられている。馬を飾り立てるために、黄金の轡(くつわ)を付けたのだろうか。鞍に刻まれた太陽や月の形は、太陽神であり月の神を具象化したと考えられ、威厳に満ちた様子を表している。朱色に染められたしりがい等も、馬を一層飾り立てている。馬を飾り立てることにより、乗馬の者を英雄に仕立てている。現代風に言えば、黒塗りの高級車に乗る身分の高い人のようなもので、当時の乗馬が社会的地位を示すステイタス・シンボル（身分の象徴）になっている。

事例２は、狩俣のクイチャー・アーグ「砂川ブナ」である（『「平良市史』1978）。大按司と美女ブナの恋を謳ったもの。「東川根盛加越」と同様に乗馬は栗毛である。事例１、２ともに男尊女卑の思想は微塵(みじん)もないのが特徴である。事例１と違うのは、鞍が金の鞍、銀の鞍と豪華になっていることと、太陽の形が前輪(まえわ)で月の形は後輪(しずわ)になっている。

事例２　砂川ブナ　（狩俣）

１	アタラマヌ　ミャキミボス　オハズ	アタラマの振り返ってみたい　大按司
２	ユカイモノ　インスモノ　ヤリバ	幸せな人　縁起良い者　　であるから
10	ナラキンバ　オイシャゴバ　トリガキ	自分の着物を　衣裳を　取って掛け
11	ナラ　ヌマヤ　ココロギャ　イダシ	自分の馬を　栗毛の馬を　引き出して
12	クガニフラ　ナモザフラ　カキデ	黄金の鞍　銀の鞍を　掛けて
13	ゾガキデアバ　ノノゾガギ　カキデ	尻尾かけは　布の鞦をかけて
14	パラビデアバ　イツバラビ　シミデ	腹帯を　糸腹帯を　締めて
15	クガニフサヤ　ナモザフツヤ　カマシ	黄金轡を　銀のくつわを　噛ませ
16	ノウリピャラ　オカリピャラ　シバド	乗って走らせ　座って走らせて　みると
17	シウラノカタンナ　ツキノカタ　テラシ	鞍の後（後輪）には　月の形が　照りつけ
18	マユラヌカタンナ　デダノカタ　テラシ	鞍の前（前輪）には　太陽の形が照りつけ
19	アンダキナー　オリホドナー　サマエ	あれほどまで　これほどまでに　なさって
21	ウルカブナ　キコイ　ミヤラビヨー	砂川ブナ　音に聞こえた　美女は
25	ンザンミャデ　ズマンミャデ　オーパズ	どこへいずこへ行かれるのか　大按司
32	ユニヨミデ　　ソロギオミデ　オオハズ	夜中まで　遊んでみよう　大按司

多良間島では「若神のエーグ」（多良間村 1989）がある。飾り馬は「砂川ブナ」と似ているが、若神が村の娘を誘惑しているところを、娘の兄に見つかり詫びる場面が謡われている。

1－2　八重山諸島の飾り馬とウタ

外間・宮良（1979）の南島歌謡大成・八重山篇から事例３「ふんかどうゆんぐと」（小浜島）と事例４「びやんな島ゆんた」（新城島）を取り上げてみた。事例３の主人公は脇差し

刀を持っているから士族である。事例４では筑登之を兄貴と呼んでいるから士族の若者であろう。双方ともエロチックな場面がリアルに謡われている。

事例３　ふんかどうゆんぐと（小浜島）

１	ふんかどうの　なかんずにぬ　道から	村角の　中心の道から
３	あんがるむかい　ぴんがすぃむかいし はりいき	東に向かい東方に向かって 走っていき
４	ばー馬ゆ　立馬ゆ　さんぎきして	私の馬を　立ち馬を引っ張って
５	馬の鞍　くんがに　とりかち	馬の鞍　黄金鞍を取り掛けて
６	馬むしる　はんだむしる　とりしぃき	馬筵を　肌筵を取って敷き
７	ばきぃんさすか　さやん　刀 とりやむち	脇差を　鞘の刀を 取り持ち
９	くぬすまぬ　島中ぬ　道から	この島の　島中の道から
11	とるしけ　みやらびぬ　あふぃり子ぬ	通ったら　乙女が　美しい娘が
12	いかゆて　なゆでうむい　いかでうむい	行き会って　何と思い如何と思い
15	馬の鞍　くんがに鞍　うしうるし	馬の鞍を　黄金の鞍を押下ろし
16	馬むしる　はんだむしる　とりぃしいき	馬筵を肌筵取って敷き
17	むむやらい　うでぃやらい　ぬびぅるんけ	股を遣り　腕を遣りあって寝ていると

事例４　びやんな島ゆんた（新城島）

４	うらうらぬ　なまら	浦々のあばずれ者
５	赤馬ば　さんぎゃき	赤馬を引いて来て
６	くがに鞍　とりやかき	黄金鞍を取り掛け
７	赤馬に　とぅんぬり	赤馬に飛び乗り
８	ていだ向い　やらしば	太陽に向かって行かせると
９	ちぃくとぅんぬ　いかゆてぃ たるひじゃぬ　とぅりやゆてぃ	筑登之が行き会って 太朗兄が通りあって
10	かやむるしぃ　ふんなし	茅叢を踏みつけ
11	くがにくら　ぴきぃうるし	黄金鞍引き下ろし
12	んまむしる　とぅりぃしき	馬の筵取って敷き

1－3　沖縄本島の飾り馬とウタ

では沖縄本島では、飾り馬のウタはどうであろうか。有名なおもろとされている「知花按司のおとまりが　ふし」を取り上げてみた（外間編『定本 おもろそうし』第 14 巻 986-5）。

事例 5　　おとまりが　ふし　　P-536

一	ちばな、おわる、	知花におられる
	めまよ、きよら、あんじの	目眉美ら按司が
又	ちばな、おわる、	知花におられる
	はぐき、きよら　あんじの	歯茎美ら按司が
又	みはち、まき	御鉢巻きを
	てぢよく、まき、しよわちへ	手強く巻給いて
又	しらかけみしよ	白掛け御衣を
	かさべみしよ　しよわちへ	重ね御衣裳にし給いて
又	大かたなよ、	大刀を
	かけさし、しよわちへ	掛け差しし給いて
又	うま、ひきの、	馬曳きの
	みぢや、ひきの、こたら	御駄曳の小太郎
又	ましらばに	真白馬に
	こがね、くら、かけて	黄金鞍掛けて
又	まえくらに、	前鞍に（前輪）
	てだの、かた、ゑがちへ	てだの形を描いて
又	しるいくらに、	後鞍に（後輪）
	月の、かた、ゑがちへ	月の形を描いて

事例 5 では主人公の知花按司が、具体的に謡われているのが特徴である。しかも「目眉(めまゆ)美」、「歯茎(はぐき)美」と女性的な表現が用いられている。これについて池宮（1977）は「神女が男装や武装することがおもろに散見されるし、また神女が乗馬したり疑似武器を手にしたりする風も残っている」と述べている。 つまり、古来乗馬していた神女が、知花の若按司という英雄に変わったため、馬上の「人」が女性的な面影を残しているというのである。黄金鞍や太陽や月の彫刻は宮古島でも謡われているが、白馬であることや馬曳きの者を伴っていることなど、神とのつながりが読み取れる。

島を巡行するウタとして、伊平屋島田名村の「大城グワイナ」（外間、玉城 1980）がある。勝連城の阿麻和利(あまわり)を称えたウタで、馬具の飾り立ては派手ではないが、乗馬して島々の巡行する模様がくわしく謡われている。ウタの最後に「我が首里加那志の御目に掛けて」、「伊平屋祝女に押し上げて」、「喜界祝女に押し上げよう」と奄美喜界島のノロまで褒め称えているのが注目される。喜界島と伊平屋島そして首里王府との間に、馬とノロとのつながりが垣間見えてくる。

事例 6 は有名なオモロである（『おもろそうし』第 10 巻 514-4）。歴代琉球国王が遙拝(ようはい)の地として拝んできた知念半島の「斎場御嶽」（セーファーウタキ）の神歌である。このウタ

の馬は古くから「さんこおり」という聖域で飼われていたことになっており、この馬が飾り立てられて一層神聖化した乗り物になっている。

事例６　うちいでは　おしかけふし

一	さやはだけ、みちやけ、	斎場嶽　御嶽
	ゑよ、ゑ、やれ　おせ	エヨ　エ　遣れ　押せ
又	そこにやだけ、みちやけ、	ソコニヤ嶽　御嶽
又	さんごおり、あつる	サンコオリにずっといる
又	さんみや、あしあげ、あつる	サンミヤ　アシアゲにずっと前からいる
又	よきの、いろの、つまぐろ	雪の色のツマグロ（爪黒・馬の美称語）
又	ましぢよ、ぎやの、つまぐろ	真白雪のツマグロに
又	金、きやぐら、よりかけ	金の鞍を寄り掛け
又	なむぢや、きやぐら、よりかけ	銀の鞍を寄り掛け
又	玉しりぎや、よりかけ	立派な鞦（しりがい）寄り掛け
又	玉くみぎや、よりかけ	立派なクミガイ（鞦の対句）を寄り掛け
又	でおの　いと、まはるび	すばらしい絹糸の真腹帯
又	くもこたづな、よりかけ	美しい手綱を寄り掛け
又	大ぎみの、めしよわちへ	聞得大君がお乗りになって
又	くにもりぎや、めしよわちへ	国守り（大君の対句）がお乗りになって
又	ばてんばま　おれわちへ	馬天浜にお降りになって
又	浦まわり、めしよわちへ	浦廻り（船名）にお乗りになって
又	あがるいに、あよみわ	東方にあ歩みなさろう
又	てだが　あなに、あよみわ	太陽の穴にお歩みなさろう

事例６の、真白雪は白馬（月毛）のことで、ツマグロは琉球馬の特徴である強固なひづめのことを指している。馬具の金襴豪華（きんらんごうか）さは、これまでのウタでもみてきた。しかし聞得大君が神送りするための馬は、ただの飾り馬ではない。「さんこおり」とは斎場御嶽内にある二枚の巨岩がお互いに寄りかかって生じた三角形のトンネルを潜り抜けて達する狭い空地で、「こおり」は道具などを入れておく裏部屋、庫理と関係がある語（『沖縄語辞典』）である。

島村（1992）は聖地である「さんこおり」に昔から馬が存在していたと表現することで、馬の神聖化し称えていると述べている。また、沖縄には雪は降らないが、白馬の清浄さを表現するため、真白雪と美称語で詠んだと解釈している。そして、金の鞍や銀の鞍に絹糸で織った腹帯、美しい手綱など馬の装いを美称辞を重ねて称えることで、馬が神の聖なる乗り物だと考えている。このウタには、神を象徴するために鞍にかたどられた太陽と月の形はない。代わりに海上をわたる船が謡われている。このウタの主人公は聞得大君で、神送りのウタで

あるが、神という言葉がどこにも見あたらない。
ところで斎場御嶽と関わりの深い久高島には馬はいない。しかし、イザイホーの「祭礼のとき、ニライ・カナイの海の彼方から、クバの大木の間を通り、神が白馬に乗って来訪すると信じられている。馬は神の占有物で『神聖な島だからこそ、馬を一般で飼うことは神が許さない』との考え方である」（宮城 1978）。

1－4　奄美大島の飾り馬とウタ

次に奄美大島における飾り馬のウタはどうだろうか。
奄美のユタが神に乗り移る儀礼で、自らの出自（しゅつじ）を神に唱える呪詞「マレガタレ」（生れ語れ）のウタを紹介する（池宮城 1984）

事例７　マレガタレ　　奄美大島

ましろけわかさんぜ	真白毛若三歳
きんのくらうちかけて	金の鞍打ち掛けて
にぎりあぐんたれだれと	右のあぶみはたれて
ひざりあぐんたれだれと	左のあぶみはたれて
まえぐらやてだぬかたとらされて	鞍の前（前輪）には、太陽の型をとり
うしろぐらやつきのかたとらさげて	鞍の後（後輪）には、月の型をとり
わんどごちはりはめて	轡をはりはめて
いそたちなひきまわし	糸手綱を引き回し
まひきぬこたらじよ	馬曳きの小太郎よ
わんぬてだ゛うちのりかけて	私の日（太陽）の神、乗り移られた

事例７は白馬（月毛）に載せられた金の鞍には、前輪と後輪に太陽と月の形がかたどられている。左右の「鐙（あぶみ）がたれて」とはどういう意味だろうか。琉球には王府の奥方などが鞍上に側座する風習がある。側座とは一方の鐙に２つの足を揃えて乗る騎馬法である。このウタでは、馬曳きを伴って白馬に乗ってきたユタに、太陽の神が乗り移られたと唱えている。

事例８　217　神送りの歌

２　ゆう、てりや、しまちゃん	夕、照れば、島は和やか
３　たけへ、もどろ	御嶽へ帰ろう
４　かぐらへ、もどろ	神座へもどろ
５　かみ、のり、ま、ゆうれ	神乗馬、ゆれ
６　のろ、のり、ま、ゆうれ	のろ乗馬、ゆれ
７　こがねむち、なんじゃむち	黄金の鞭、銀の鞭

8	まえゆうれ、しりゆうれ	前ゆれ、後ゆれ
9	かたつらみれば、つきのすがた	片面みれば、月の姿
10	かたつらみれば　てだのすがた	片面みれば、太陽の姿
11	しりかけや、きぬのぬの	尻かけは、絹の布
12	まわる、きゆびや、まくろきぬ	廻す、帯は黒の絹
13	おもかけや　まをのきぬ	面がいは、真麻の布
16	あぶみ、くみ	足踏み、踏み
19	てづな、とて、とびあがろ	手綱とって、とびあがろ
21	み、きよら、牧、きよら牧	御きよら牧、きよら牧
22	のろ、のりま、かみ、のりま	のろが乗馬、神が乗馬
26	さらてん、みなと	新天の港
44	おがまば、おがめ	拝まば、拝め
45	てすりよ、やば、てすりよ	手すり、やば、手すりよ
46	なまど、のぼてきた、あがてきた	今ぞ登ってきた、上がってきた

茂野幽考『奄美民謡注解』

事例 8 のウタ（田畑ら 1979）は神とノロが、飾り馬に乗って山超え牧場をこえて新天の港まで行き、そこで神を見送るウタである。海に出て神送りするのは「聞得大君のおもろ」でも同じである。事例８の「神送りの歌」では、牧場が謡われている。オモロ第 13－936、「首里ゑとのふし」の解説と関連づけてみよう。

首里ゑとのふし

１ゑらふよのぬしの　ゑらておちやる	永良部世の主が　選んでおいた
みちやふれ	土触れ（馬の美称語）
みちやふれや　世のぬしちよ　まちよる	土触れ　世の主こそ待っているのだ
又はなれ世のぬしの　又金くらかけて	離れ世の主が　金鞍を掛けて
よわとまり　おれて	与和泊に降りて

この「首里ゑとのふし」のウタと「神送りの歌」の牧場と重ねてみると、沖永良部から首里王府に献上馬が贈られたことが窺い知ることができる。他のウタでは黄金の轡を口にかます表現がみられるが、事例 8 では面繋（おもがい）の表現になっている。面繋は轡（くつわ）より古い馬具である。また「神送りの歌」では鞍ではなく、鞭（むち）となっている。琉球では馬に乗るとき、一般的に鞭は使わない。神送りのウタなので、鞍に太陽や月の神をかたどって馬上に残すことは許されず、そのため鞭（むち）に太陽と月の姿を描いて神にみやげものとして持たせたのだろう。

1―5　飾り馬のウタの比較

以上の８つの事例を取り上げてみたが、これを表１で比べてみた。

表１．飾り馬の主人と行動

事例	地域	歌謡名	誰が	どんな馬に乗って		何をしたか
				毛色	馬具　鞍の彫刻	
例１	宮古島	東川根盛加越	按司	栗毛	金の轡 月・太陽	按司と人妻の恋
例２	宮古島	砂川ブナ	按司	栗毛	金の鞍 太陽・月	按司とブナの恋
例３	八重山	ふんかどうゆんぐと	士族	？	金の鞍	男女の恋
例４	八重山島	平安名島ゆんた	士族	赤馬	金の鞍	男女の恋
例５	沖縄本島	知花おもろ	按司	白馬	金の鞍、太陽・月	島廻り・馬曳き
参考	沖縄本島	大城ｸﾞﾜｲﾅ	按司	？	唐鞍桑鞍芭蕉手綱飾	島廻り
例６	沖縄本島	おもろ 10-514	大君	白馬	金の鞍、絹糸腹帯	神送り
例７	奄美大島	ﾏﾚｶﾞﾀﾚ	ノロ	白馬	金の鞍、太陽・月	祭祀儀礼・馬曳
参考	奄美大島	のりがみのオモリ	ノロ	？	金の鞍　麻糸腹帯	神送り、村人大勢
例８	奄美大島	神送りの歌	ノロ	？	金の鞭、太陽・月	神送り

最初に主人公を比較してみると、八重山島（士族）→宮古島（按司）→沖縄本島（按司）→（聞得大君）→奄美大島（ノロ）となる。

次に飾り馬についてである。馬具では鞍が金と銀に輝き、鞍の前輪（まえわ）には太陽が後輪（しずわ）には月の形を「飾り」、「照らし」、「描いて」、「型をとり」と謡われているが、どう図案化（デザイン）されたかは明かでない。首里城の南殿に「黒漆巴紋（ともえもん）散らし鶺鴒螺鈿（せきれいらでん）鞍」が展示されている。その鞍の前輪（まえわ）には 46 個の巴紋が螺鈿で飾られ、後輪（しずわ）には星の光のように放射線文様の螺鈿が細工されている。この螺鈿紋・文様は厳粛な太陽神と月の神を具象化したようである。金銀の鞍の他には、麻糸や絹糸で織られた最高級の布が手綱や腹帯、鞦（しりがい）に充てられている。当時の百姓はアダナス綱を手綱に用いたと考えられるので、麻布の手綱は最高級の品である。「聞得大君のおもろ」は神送りのウタである。鞍の前輪と後輪に描かれた太陽と月の形はない。神の形を馬上に残すことは許されないことであったであろう。

奄美や沖縄本島における馬は月毛の白い馬で、ノロや聞得大君が乗馬している。白馬は神の神聖な乗り物である。一方宮古・八重山地域の按司や士族の若者の乗馬は、アカンマとかクリギャ（栗毛）と呼ばれる馬である。

飾り馬と主人公が行動は、奄美・沖縄本島が神送りや祭祀儀礼、島廻りになっている。　一方、宮古・八重山地域では、乗馬して女性に近づきロマンス（恋物語）を謡っている。

以上のことから、飾り馬が神の乗り物として神聖化されていた地域は奄美大島であり、それが沖縄本島に移行している。宮古・八重山地域では神とのつながりは弱い。従って飾り馬との係わりは宮古・八重山地域は時代的に新しい。筆者は「宮古馬のルーツを探る」で、宮

古馬の渡来経路について、対州馬が博多発、長崎・奄美経由で沖縄本島に入り、その後宮古島、八重山諸島に入ったと述べた（長濱 2012）。飾り馬のウタの移動ルートは、在来馬の渡来経路を反映したものと考えられる。また南部圏（先島）における飾り馬のウタの存在は、琉球文化圏の統一化を示したものである。金の鞍に象られた太陽の飾りからは、馬が太陽神を乗せる神聖なものであること。そして太陽神信仰の広がりを窺うことができる。

2　江戸献上馬

宮古馬が献上馬として採用されたことは、旧記などで明かである。「宮古島在番記」によると「1713（康熙 52）年、江戸献上の馬御目利として御下島、真喜屋親雲上」とある。二回目は「1746（乾隆 11）年、御献上の御馬目利として御下島なされた。真喜屋里之子親雲上」。三回目は「1838(道光 18)年、大和への御献上馬目利のため３月下島し、４月には八重山島に渡島し、更に同年５月帰国された。別当・真喜屋親雲上」と記録されている。別当とは、首里王府の御馬を担当する最高責任者である。

与世山親方宮古島規模帳（1767）「138 条　宮古島生まれの馬はいつも御用または毎年諸士のあつらえがある。とりわけ繁殖させなければならないので、伊良部下地の馬牧の番人等は頭の下に設けてある。油断なく保護に念を入れ年に二度ずつ担当役人と筆者は相談して蔵元へその経過を報告し、「馬帳」二冊を作成して一冊は蔵元で保管し、一冊は担当役人が保管する。（馬の）生死の扱いは、在番と頭の印を申請する決まりである」となっている。首里王府は宮古島に対し江戸献上馬や御用馬を調達するため、積極的な施策を講じている。1673 年に宮古島在番として馬氏の高江洲親雲上、岸本、喜屋武筑登之親雲上を派遣した。その頃、伊良部の馬牧は整備されたと考えられる。1678 年には、与世山親方宮古島規模帳の基となる恩納親方規模帳が公布されたようで、1698 年には献上馬や御用馬を選抜するための馬場を設置（「雍正旧記．1727」）、1713 年に真喜屋親雲上の宮古島来島となった。

2－1　江戸立ちと献上馬

では宮古馬を含む貢馬を、徳川幕府に献上するための江戸立ちをみることにする。

中山王が江戸に派遣する使節は 1634 年に始まり、1850 年までに 18 回行われている。幕府の新しい将軍の就任を祝賀する使節が慶賀使であり、琉球国王の世替わりの時に、感謝するための使節が謝恩使である。宮城(1982)によれば、使節団の人数は約百人で、正使には王子を、副使には三司官（紫冠）クラスが充てられた。行列と路地楽を総括する儀衛正、献上する馬を総括する圉師、書翰を担当する掌翰使、讃儀官、楽正、楽師、使讃等には親雲上（黄冠）が充てられた。楽童子には歌舞や書道、詩歌に優れた良家の美少年が選ばれた。使節団は琉球から鹿児島に渡り、九州の西海岸沿いに福岡を通り、下関から瀬戸内海の港を渡って、大阪から淀川を上がって東海道を進み江戸城に向かった。片道２千㎞にもおよぶもので、６月頃に那覇を出発し、11 月頃に江戸に着く長旅である。

表 2. 琉球使節の江戸派遣圉師と貢馬数

年	目的	正 使	人数	貢馬	圉師（別当）	備　　考
1634	慶賀使 謝恩使	佐敷王子 金武王子	?	1 頭 馬代		貢馬は中山王から徳川将軍へ 馬代は銀 50 枚
1644	慶賀使 謝恩使	金武王子 国頭王子	70	1 頭 馬代	野国親雲上	下庫理官御馬兼職 使節団の騎馬 24 名（宮城 p-54）
1649	謝恩使	具志川王子	63	馬代	野国親雲上	（1651 年に御馬当職を配置）
1653	慶賀使	国頭王子	71	馬代		慶賀使の馬代は異例
1671	謝恩使	金武王子	74	馬代	御馬当職を別当へ改名	○（1678 年恩納親方宮古島規模帳） 1680 清国への献上馬終了（歴代宝案） （1681 年 薩摩から「覚」布達）
1682	慶賀使	名護王子	94	1 頭		（1689 年王府馬場・真地設置）
1710	慶賀使 謝恩使	美里王子 金武王子	168	1 頭 馬代	真喜屋親雲上 （貢馬は黒粕毛）	○（1698 年宮古島で馬場設置） 貢馬は黒粕毛（知られざる琉球使節） 使節団騎馬行列の乱れ改善せず
1714	慶賀使 謝恩使	与那城王子 金武王子	170	1 頭	真喜屋親雲上	別当を圉師に改名 ○（1713 年宮古島で貢馬の選抜）
1718	慶賀使	越来王子	94	1 頭	瑞慶覧親雲上	○（1746 年宮古島で貢馬の選抜） 貢馬は鹿毛（横山 p-426）
1748	慶賀使	具志川王子	98	3 頭	真喜屋親雲上	将軍と大御所、若君３名に貢馬
1752	謝恩使	今帰仁王子	94	馬代	真喜屋親雲上	貢馬なし圉師同行
1764	慶賀使	読谷王子	96	2 頭	真喜屋親雲上	将軍と若君に貢馬（鹿毛 2 頭県博図録） ○1767 年与世山親方宮古島規模帳
1790	慶賀使	宜野湾王子	96	1 頭	真喜屋親雲上	貢馬は青毛（新琉球史グラビア） 使節団の騎馬 20 名　（新琉球史）
1796	謝恩使	大宜見王子	97	馬代		
1806	謝恩使	読谷王子	97	馬代		
1832	謝恩使	豊見城王子	98	馬代		
1842	慶賀使	浦添王子	99	1 頭	真喜屋親雲上	○1838 年宮古島石垣島で貢馬選抜
1850	謝恩使	玉川王子	99	馬代		
計				13 頭		

資料：『雍正旧記 1727』（宮古島）、『球陽 1745』、「与世山親方宮古島規模帳 1767」、『宮古島在番記 1780-1894』、宮城栄昌「琉球使者の江戸上り」、横山学「琉球国使節渡来の研究」、沖縄県立博物館・美術館「2009 年特別展図録」。福山市鞆の浦歴史民俗資料館「知られざる琉球使節ー国際都市・鞆の浦ー」2006。

海路では幕府の指示で各藩が準備した船に乗り、陸路では正副使が轎（御輿）で、親雲上や楽童子など 25 名は借馬に騎乗し、残りは徒歩で行列して江戸に向かった。献上品など物資運搬には幕府が割り当てた百頭の伝馬と坦夫 532 人（1832 年）があたっている（小野 2009）。

表 2 でも明らかなように、将軍の就任祝う慶賀使節にあたり、中山王より徳川将軍に琉球馬が献上されている。1653 年の慶賀使が献上馬がないのは異例で、貢馬が江戸に向かう途中に事故死したことも考えられる。那覇を出発して江戸に到達するには半年も期間を要することから、貢馬の移動は並大抵ではなかったと考えられる。にもかかわらず貢馬を琉球から引き連れたのは、各藩諸大名が江戸参勤時に将軍に太刀一振りと御馬を君臣儀礼の品として献上していたことに準じている（横山 1987）。琉球からの慶賀使は 11 回行われ、江戸献上馬は合わせて 13 頭である（表２）。貢馬の毛色は、鹿毛や青毛、黒粕毛が確認できる。この馬は、本土産に比べて小型でおとなしい性格のため、将軍家の若君の乗馬訓練に活用されたのではないかと考えられる。謝恩使では、馬代として銀 50 枚を奉じられた。

貢馬の献上にあたっては、王府御馬の責任者である「別当」が同行している。「別当」とは奈良、平安時代の勅旨牧を総括していた牧監と同じで国司に次ぐ位とされ、当時から朝廷に駒牽きを担当する長官であった（町田 1995）。1745 年に編纂された『球陽』によれば、「1651 尚質王 8 年、328 条　始めて御馬当職を設く。往昔の時、下庫理当官、御馬を兼管す。是の年、武魁春（野国親雲上・宋保 1599~1675）始めて、この職を授かる。後年に到り魁春題請して御別当と改名する。」となっている。

この記録からも解るように、王府の御馬は双紙庫理の配下にある下庫理が兼職しており、1651 年に御馬当職が設置されて、野國親雲上が任用されている。そして 1660～1670 年頃に、野國親雲上の提案により御馬当職が別当職に改名されている。

2－2　貢馬担当・野國親雲上の名馬

野國親雲上は琉球使節団の貢馬担当として、1634 年と 1644 年に江戸に派遣されている。行路中や江戸の公式行事で、馬に関する数多くの情報や文化と接している。こうした上京中の交流の中で別当職名の情報に接し、首里王府に帰ってから御馬当職の改名を申し出たものと考えられる。

『球陽』の遺老説伝には、1640 年久米島に仲黒馬という名馬があり、中山王府が引き取り野國親雲上・宋保が調教して薩摩の太守光久公に献上したと記録されている。野國親雲上（1599～1675）について遺老説伝には、次のように記録されている。

> 「姑米山より、仲黒馬を以て中山に渡来せしむ。斯の馬を看相するに、蹄齧蹋跳して人騎するに能はず。独り武魁春（野國親雲上宋保）有り。善く馬に騎し、善く馬を訓す。法司、武魁春をして、この馬を騎訓せしむ。已に三句を経て、索無くて馳せず、羈無くして即ち治まる。恒に武魁春に随ひて、以て走停を為すこと、狗犬の猶主人に従うがごとし。是に由りて、法司、武魁春をして、斯の馬を護運せしめ、薩摩に到りて

光久公に献上す。光久公、角楼に座御し、薩州の主掌馬官に令して、斯の馬に騎せしめんとするに、蹄齧踢跳（ていけつきょくちょう）して馭（ぎょ）騎する能はず。光久公、武魁春に令して、斯の馬を試せしむ。武魁春、鞭を取り馬に騎して、敢えて畏憚（いたん）（おそれはばかる）せず。鞭を打ち、汝騎馬に功有り。妙を得ると謂（い）ふべしと。遂に褒賞を蒙（こうむ）りて帰国す。」

岡田(1935)も沖縄の名馬ついて「沖縄島の概況」で取り上げている。鹿毛急車と仲田青毛、飛天栗毛の三頭である。急車とは近代的な名前なので、後年に命名したのであろう。三頭の馬は王府の厩で飼われたと考えられる。また、宮廷画家の自了（じりょう）によって絵に描かれた野國村の名馬にも触れている。自了(1614～1644)という雅名は、尚豊王から賜ったものである（中山 1969）。岡田が紹介している國華（第 42 編第 2 冊 495 号 昭和 7 年 2 月発刊）の記録では「城間親雲上清信の長男自了筆の野國馬図解に野國宋保は馬術の名人 二疋の名馬を見立てて野國馬と號していた。鹿児島に伝わり終わる時の、琉球奉行阿多内膳正をして、この二疋を召連れさせたその節、太氏原城間清信子は絵が達者で自了と號していたが、彼をして此馬の形を写させたのがこの絵である。この馬は日本で種馬になった」となっている。

鹿毛急車と仲田青毛の絵は 1938(昭和 13)年発行の「日本生物地理学会会報」に掲載されている。この 2 頭の名馬の絵には「尚穆王代」との記載がある。これについて梅崎 (2012)は「『那覇市史』によれば仲田青毛が出現したのは寛永年間(1624～1645)なので、尚穆王(1752～1794)とは 100 年以上の隔たりがある。」と述べ、仲田青毛の元絵が創作されたのは尚豊王代(1621～1640)であり、作者は宮廷画家・自了の可能性をあげている。

2－3　別当・圉師一門の真喜屋親雲上

野國親雲上に次いで、別当職に任用されたのは真喜屋親雲上である。真喜屋一門は宮古島に三度も来島し、献上馬や御用馬を選抜している（「宮古島在番記」1780～1894）。最初に宮古島に来島(1713 年)した真喜屋親雲上は、翌年に江戸への慶賀使節団に、貢馬担当として加わっている。この年(1714)に琉球使節の官職名が変更され、別当は圉師（ぎょし）と称されるようになった(横山 1987)。圉師という官職名については、中国の周代に馬を世話する官名を圉人（ぎょじん）と称した（小林編　漢和辞典 1992）ことから、騎馬技術を備えたすぐれ者の職名を、圉師と称したと考える。中国文化の影響を受けたもので、久米村出身の親雲上によって提案されたのであろう。「献上馬御目利き」で二度目に宮古島に来島（1746）したのは、真喜屋里之子親雲上となっている。里之子親雲上は 2 年後に圉師として江戸立している。この時は中山王から将軍だけでなく大御所と若君にも琉球馬が献上された。三度目は真喜屋里之子親雲上が来島して 92 年後の 1838 年である。最初に来島した親雲上の子孫で宮古島在番記には職名が別当と記載され、八重山島まで渡ったことが記録されている。来島の目的が「大和への御献上馬御目利き」となっているから、薩摩への献上馬も調達している。江戸派遣はその 4 年後である。

ところで 1752 年の謝恩使に貢馬はないが、圉師が派遣されている。このことは圉師の役割

が、貢馬の世話と将軍への献上時の立ち会いだけではなかったことを意味している。これには、1681 年に薩摩から首里王府に下された「覚」の影響が考えられる。覚の内容は「先年、使節の付け衆の衣裳や馬の乗り掛け廻しが麁相（粗相）であるので改善するように」との薩摩から琉球への御達しである（豊見山 2009）。衣裳については豊見山の「江戸上りから江戸立へ　－琉球使節像の転回－」にくわしく述べられている。その延長で考えれば、「馬の乗り掛け廻しの麁相（粗相）」という指摘は、琉球使節に対して威風堂々たる騎馬行列を期待していたことになる。王府の対応もそれを裏付けている。首里王府は「覚」を受けて騎馬訓練の施設として、王府直属の馬場を 1688 年に設置したのである。

『球陽』巻八 596「馬場を平良邑の地に開く。首里に戯馬乗有ること無く、人民各処に行き到りて騎馬の法を習ふ。是の年に至り、地を平良邑の西に卜し、始めて馬場を開き、人民垣に以て騎馬す。俗に名付けて平良真地と曰ふ」。この記録から馬場は競馬を目的にしたものではなく「騎馬の法を習ふ」ための施設だったことが明かである。江戸への使節団もここで騎馬訓練をしたため「人民垣に以て騎馬」するほどにぎわったのであろう。

圍師の本来の職務は貢馬の世話であるにも係わらず、貢馬のない謝恩使に圍師・真喜屋が同行したのは、使節団の騎馬技術のサポートにあったと考える。

使節団は馬場で騎馬訓練を行い、謝恩使に圍師を同行させるなど騎馬行列の改善に努めたにもかかわらず、、琉球使節の騎馬行列の乱れは一向に改善されていない。1790 年の江戸立ちの絵巻が残されている。正副使の轎を中心にして儀衛正、圍師、掌翰使、讃儀官、楽正、楽童子までの騎馬行列は威風堂々と整列して行われているが、使讃など後列の 7 騎馬は粗末な馬の乗り廻しである。（琉球新報社編 1989）

1832 年の儀衛正日記によれば、江戸についた使節団は、薩摩屋敷で登城行列の練習を行い、さらに讃議官以下楽童子までが、馬場にて騎馬の稽古をしている（小野 2009）。騎馬行列の乱れが改善されていないことは、各藩から提供された借馬に起因していることを、馬術の名門・真喜屋親雲上は解っていたのではないだろうか。

初代真喜屋親雲上（1710 年）から圍師職を代々受け継ぎ、最後の琉球王尚泰（1879 年）の代には、真喜屋親雲上・実応が務め(新垣 1972)、169 年の長期間にわたり御用馬を担当してきた家柄である。彼ら一門は本土産の馬を、琉球に導入した形跡を残していない。本土産馬は中型馬で体格は優れているが、性質の粗暴で扱い難い馬としてみなしていたから導入しなかったと考える。真喜屋一門が長期間にわたり馬政を掌握していたことは、琉球馬にとって幸運であったといえる。後で触れるが、中国から来島した冊封使のほとんどが、琉球馬を好意的に見ていたことも影響したと思われる。

この真喜屋親雲上については、馬術の名人として逸話が残されている。「真喜屋親雲上は馬乗り真喜屋（マーザ）と呼ばれていた。島添アザナ（南部の大里城）の東の石垣は高く積まれていた。この石垣の高いところに暴れた馬が逃げ込み立ち往生していた。石垣の天辺は 5 尺程度の広さで馬にとってはUターンできるような広さではなかった。こうした事態を聞

いた真喜屋親雲上は、石垣にかけ登り鞍を馬にしっかり取り付けてから飛び乗り、前足を立てたまま手綱を右に引き絞って馬を回れ右させ、後ろ足だけでパカパカと石垣を下り無事助かったとのことである」。（新垣 1975）

ところで江戸や薩摩に献上する貴重品の中に、細い麻糸で織られた宮古上布が大平布として記録されている。宮古島で酒造した酒は太平酒として、また宮古船は大平山船として冊封使・徐葆光の「中山伝信録」に記録されている。しかし宮古島から送り出された貢馬は、大平馬とは称されていない。これは貢馬数が少なかったためで、産地名を称えるほどではなかったことを意味している。首里王府は献上馬調達を目的に、百姓の乗馬禁止、馬肉食用の禁止、牧管理の徹底など行い、馬の生産を督励していた。しかし、江戸献上馬は少数であった。このことは貢馬が君臣儀礼の品で多くを必要としない。だが、献上馬生産を大義名分にすることで、中国からの冊封使を送迎する多数の御用馬を確保することができるとの戦略があったと考えられる。

3　冊封使の送迎用の琉球馬

1756 年の尚穆王を冊封するために、中国から来島した冊封使一行を描いた絵巻がある。筆者は不明となっている。縦は 25.3 ㎝横は 22m42.5 ㎝の大きさでカラーで描かれた絵巻は沖縄県博物館・美術館に所蔵されている。その複写が中国・北京故宮博物院秘蔵「甦る琉球王国の輝き」特別展図録(2008)に収められている。また首里城北殿にも拡大した模写絵巻が描かれている。この乗馬には、御用馬として引き取られた宮古馬も数多いと考える。冊封使行列絵巻では首里王府の三司官（紫冠）二人が先導し、その後を 10 名の浮織冠（王子など王族）、10 名の黄冠(親雲上）が続き、190 名の筑登之（赤冠）とともに馬曳きや荷担ぎ人、傘持ちなど無冠の 150 名が加わっている。冊封使の行列に混じって荷物を運ぶ王府の赤冠 48 名がいることから、琉球側の人数は合わせて 410 名となる。そのうち乗馬した王府の高官は 22 名で、馬の口には轡（くつわ）が咬まされ、２人の口取りが馬を曳いている。王府側の騎馬には、鞍の下に敷く障泥（あおり）を青で統一し、鐙は木彫りの上等品である。鞍の四方からは紅白の上布がなびき、騎馬を一層飾り立てている。

一方、冊封使側の行列参加者は 215 名（渡来者約 450 名）である。正使と副使がそれぞれ 8 名の中国使節が担ぐ轎（きょう）（肩輿）に座っている。正副使には、青毛と鹿毛の引き馬が準備されている。冊封使側の騎馬で行進するのは式官・文官など 93 名で、鞍の下に敷く障泥（あおり）は赤色で統一されている。鐙（あぶみ）は足を乗せるだけの単純なもの。面繋（おもがい）による制御で、馬曳きも伴っていない。絵巻で見るように歓迎する首里王府の役人達は豪華な飾り馬で、口取り二人が馬を誘導している。琉球使節が江戸立ちでみせた騎馬法である。しかし中国からの使節には口取りも付かず、琉球本来の騎馬法である。こうした騎馬法の違いは何を意味しているのだろうか。王府側は浮織冠、紫冠、黄冠など王府の最高幹部の面々である。この騎馬法は、首里王府の誇りを琉球国の人々に示したものと考える。

3－1　冊封使がみた琉球馬

この冊封使行列に加わった人が体験記を残している。時系列にならべてみよう。

①1534 年の冊封正使・陳侃は、彼の著書「使琉球録」で「（野馬）、牛、豚は多く、その価格は大変安く一頭当たり銀 2、3 銭にすぎない。注①

②1579 年の冊封正使・蕭崇業は「使琉球録」を著し、その中で「 馬、牛、羊、豚富むも、形多く痩削、その価極めて安い」と述べている。

③1683 年の冊封正使・汪楫は著書「使琉球雑録」で「 中山は馬大いに生息す。耕地皆馬を用いる。周年青草を食し、大豆を費さず、貧民も之を養う。事あれば即ち公家に役す。天使国に入るとき、従人乗馬せざるもの無し。馬は川馬に比べれば少々大なり。遠く辺馬におよばず。」と記録している。

④1719 年の冊封副使・徐葆光は「中山伝信録」を著し詳細な記録を残している。

「馬は中国とちがわない。高さは７、８尺（寸が正しい、注②）のものは殆どいない。パカパカとよく歩く。山道のけわしい所、砂利の中もころばない。これはその習性である。山を登り水をわたるときは走る。この地は暖かくて冬も草が枯れない。馬は一年中、青草を食んで飼料用の豆は知らない。だから村の貧しい家でも、みんな馬をたくわえている。何か事があれば、集めて使い、事が終われば各家にかえす。村家で馬をつかって耕作するものもいる。官吏の奥方が馬に乗るときは、襟をたてて顔をかくし、多くは鞍の上に横すわりになり、両足を片側の鐙にそろえる。人が手綱をとってゆっくりと歩ませる。前使の汪楫の録に書かれているが、今もたまたま見ることがある」。とても詳細な記録である。

⑤1800 年の冊封副使・李鼎元は、彼の「使琉球記」のなかで「馬は朝鮮の果下馬に比べるとやや高い。耳は特に長く、性質は人なつっこく、砂礫の中を歩いても転がったり躓いたりしない。先の諭祭礼の８日には馬が数百頭出たが、すべて雄ばかりであった。雌を使わなかったのは、列を乱す恐れがあったからである」と述べている。

注①：原文では野馬の記載あり。訳注では野馬が欠如している。

注②：原文と訳注とも尺である。しかし馬の体高が 7 尺（212 ㎝）8 尺（242 ㎝）はあり得ない。現在の競馬用のサラブレットの体高は 5 尺 5 寸(166 ㎝)程度である。尺は中国伝来のもの。鎌倉時代には馬の体高を 4 尺を定尺として 1 寸、2 寸、3 寸～と測定し名馬を選んでいた。4 尺は 121 ㎝で小型馬、4 尺 5 寸は 136.㎝で中型馬、4 尺 7 寸は 142.㎝、5 尺は 151.㎝で大型馬とされていた。1 尺は 30.3 ㎝。（「古今要覧」、「貞丈雑記」．林田重幸．1974．日本在来馬の源流．in 森浩一編．日本古代文化の探求．馬．p.228．より引用）

3－2　琉球馬の評価

冊封使の記録からは、琉球馬の性質や特徴などが明らかにされている。

「性質は人なつっこく、砂礫の中を歩いても転がったり躓いたりしない」（李鼎元）。「こ

の国の人は誰も鞭を使わない。乗馬のうまい人は手綱をはなしたままで早足させる。そうでない人は、木の枝を折って鞭にし、馬からおりるとすててしまう」（徐葆光）。冊封使録からは、琉球馬は痩せて値段が安い（陳侃1534 と蕭崇業1573）との記録以外は大きな欠点は指摘されていない。「年中青草で飼育できる。そのため貧民まで飼育している」。徐葆光は「山道のけわしい所、砂利の中もころばない。これはその習性である。山を登り水をわたるときは走る」などと琉球馬の特徴を評価している。汪楫は「洪武代と永楽代に明国が琉球から馬を購入したことや献上馬があった」ことを承知している。清国への貢馬が終了した1680 年以降、琉球に渡来した冊封使たちは、琉球馬が小柄で役立たないなどとは微塵も考えていない。このことを冊封使録から知ることができる。

3－3　琉球馬の体格

冊封使録には琉球馬の体格を推察する記録も残されている。「朝鮮の果下馬に比べるとやや高い」（李鼎元）となっており、高嶺(1948)が調査した果下馬の体高 105 ㎝より琉球馬は大きい。「川馬に比べれば少々大なり。遠く辺馬におよばず」（汪楫）とは、吉田(1926)が調査した四川省の馬 110 ㎝より少々大きく、吉田(1926)が調査した蒙古馬の 132 ㎝より小さいということである。

「馬は中国とちがわない。高さは 4 尺 7 寸(142.㎝）、4 尺 8 寸（145 ㎝）のものは殆どいない」との徐葆光の観察記録は、李鼎元や汪楫の記録とほぼ同じである。琉球馬は蒙古馬の体高 132 ㎝より小さく、朝鮮果下馬の 105 ㎝、四川省馬 110 ㎝より大きいということになる。

筆者は遺跡馬の調査から、琉球馬の体高は 121 ㎝(4 尺)以下が 3 割程度と少なく、7 割は 121 ㎝から 130 ㎝(4 尺 3 寸)の間と推察した（長濱 2012）。この結果は 3 名の冊封使の記録とほぼ一致している。

3－4　冊封使乗馬の頭数と調達方法

「事あれば即ち公家に役す」（汪楫）。「村の貧しい家でも、みんな馬をたくわえている。何か事があれば、集めて使い、事が終われば各家にかえす。村家で馬をつかって耕作するものもいる」（徐葆光）。何か事あればとは、冊封使の歓送迎など一大イベントを指している。士族の所有馬も含め、多くの馬の飼育管理は、牧場での放牧ではなく、村の百姓の手に委ねられていたと考えられる。そのため「事あれば即ち公家に役す」ことになったのであろう。

では冊封使の渡来にあたり、どれだけの馬が必要となったであろうか。

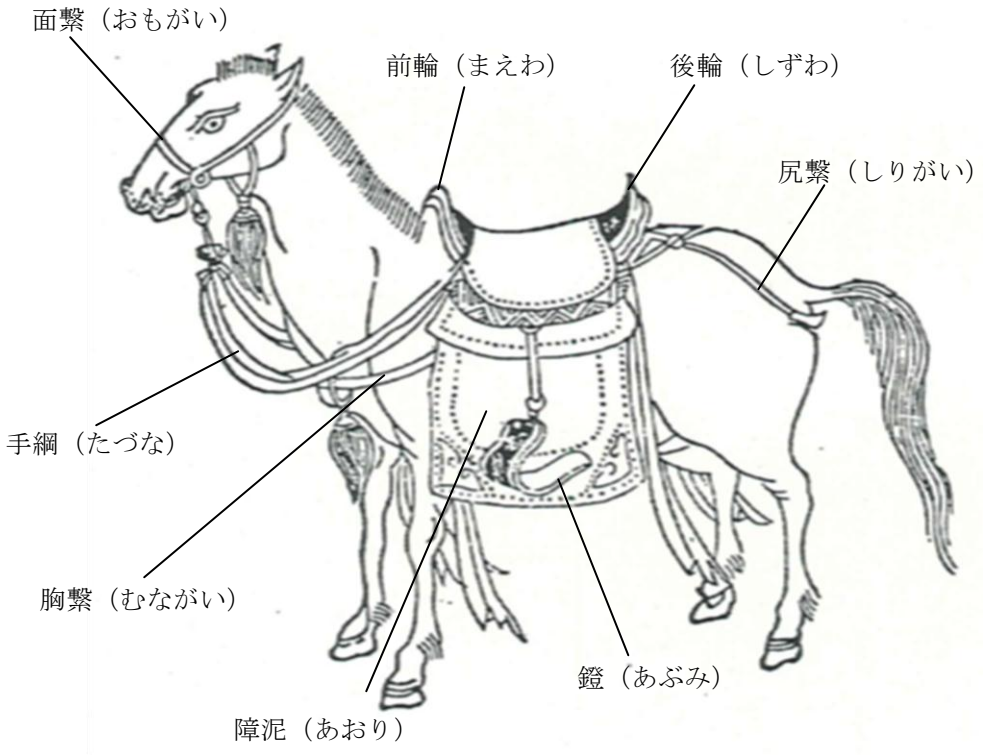
1800 年に渡来した李鼎元が「先の諭祭礼の 8 日（6 月）には馬が数百頭出たが、すべて雄ばかりであった。雌を使わなかったのは、列を乱す恐れがあったからである」と述べている。諭祭礼とは冊封儀式に先立ち、先の亡き王を供養する祭礼である。祭礼に集められた馬は、冊封儀礼のため登城する行列でも使われたであろう。李鼎元は数百頭と記録しているが、1756 年の絵巻からは、渡来した使節団の半数程度が行列に参加し、その内の半分が騎馬で登城し

ている。22 回におよぶ冊封使節団は、400～620 人となっていることから、迎える王府側の乗馬を含めると 200 騎前後と推定される。李鼎元（りていげん）が「すべて雄ばかりであった」と判定したのは、まさに正解であり、馬術のプロのなせる技であるが、200 頭前後の雄馬（去勢馬）を調達するためには、第 1 に綿密周到な計画があって可能となる。宮古島在番記の馬帳（馬籍簿）の事例から、圍師（別当）は琉球全体の馬籍簿を管理し、冊封使送迎用の馬を各村に割り当てたと考えられる。また第 2 に生産体制である。馬の 1 世代を 8 年とすれば 200 頭を常備するためには、毎年 25 頭の更新が不可欠である。冊封が始まった 1404 年から終えた 1866 年までの 462 年間、使節の渡来間隔は平均 21 年である。使節団受入に必要な 200 頭を確保するためには、渡来毎に 525 頭が更新されたことになる。こうした多くの御用馬の必要から、生産地の宮古島、八重山諸島には馬管理の厳しい「きまり」が公布されたと考える。

3－5　冊封使の描いた飾り馬

冊封使の徐葆光は貴重な記録を残している。中山伝信録の飾り馬の絵である。

中山伝信録の「馬飾圖」



注：馬具の名称は筆者

徐葆光の「馬飾圖」とあわせ詳細な記録は、極めて貴重である。

「鞍、様式は中国と同じ。黒塗りや朱塗りといろいろあって、非常に精緻なものもある。鞍の前後に紅白４本をつけ、左右にたらして馬飾りにしている。したぐらも障泥も、ともに簡略なものである。官吏で紅毛氈一枚を用いているものもある。手綱、貴族の多くは五色染めの芭蕉布の一幅を用いる。両手にまいて垂らしても、まだ馬の脇に垂れるほどである。鐙、木でつくられている。その型式は曲杓の形のようで、一辺に縄をつけて鞍の下につなぐ。その口をあけて素足でもはける。皮足袋でもはくこともある。朱塗りや黒塗りで、至極精巧なものもある」（徐葆光・訳注原田 1982）。

徐葆光の描いた飾り馬は、冊封使行列絵図で王府側の重臣が乗っている馬である。また、首里城の御庭で挙行される国王への朝賀式でも引き立てられた。「式場の御道具の配列がすむと、看馬（飾り馬）二頭が奉神門左右の掖門の前に御庭に向けて立てられた。飾り馬の手綱は、別当が持つことになっていた」（真栄平 1997）。首里城正殿の左右に設置されていた掖門は、特別な門である。この両門に飾り馬を儀礼会場に向かって立たせたのは、帰る人を乗せるためではない。儀礼を見守り、立ち会う神々を、お供してきたと考えるのが自然かも知れない。現在、民芸品として紅型で描かれた 3 頭、5 頭、9 頭セットの飾り馬がある。

4　琉球馬の毛色

琉球馬の毛色を分類してみた。分類法については、社団法人日本馬事協会の「馬の毛色及び特徴の記載要領」に基づく。分類基準は以下の通りである。

○栗毛：被毛は黄褐色で、長毛は被毛よりも濃いものから淡く白色に近いものまである。
○鹿毛：被毛は明るい赤褐色から暗い赤褐色まであるが、長毛と四肢の下部は黒色である。
○月毛：被毛はクリーム色から淡い黄白色のものまである。長毛は、被毛と同じ色から白色に近いものまである。
○河原毛：被毛は淡い黄褐色から艶のない亜麻色まである。長毛と四肢の下部は黒色である。
○青毛：被毛、長毛共に黒色である。この毛色は季節により毛の先が褐色となり、黒鹿毛や青鹿毛のように見えることもある。
○粕毛：原毛色は栗毛、鹿毛、青毛で、頭部、長毛及び肢下部を除く部位は、原色と白毛が混在するもの。
○駁毛：体に大きな白斑のあるもの。原毛色により栗駁毛、鹿駁毛、月駁毛に区分する。

4－1　近世琉球における琉球馬の毛色

1756 年の冊封使行列絵巻はカラーで描かれた絵巻で、117 頭の御用馬が丁寧に描かれているが、それぞれの馬の全体像が描かれたものではない。そのため毛色の分類は、部分的な観察で判定せざるを得なかった。そうであっても冊封使などの乗馬の毛色について、分布の概要は把握できたと考えている。絵巻から御用馬の毛色を分類すると、表 3 のようになった。

表 3. 御用馬（册封使送迎用）の毛色　1756 年

毛　色	栗毛	鹿毛	月毛	河原毛	芦毛	青毛	粕毛	駁毛	計
頭　数	45	27	10	2	2	1	15	15	117 頭
割　合	38%	23%	8%	2%	2%	1%	13%	13%	100%

資料：「甦る琉球王国の輝き」県立博物館・美術館一周年記念特別展 2008

絵巻に描かれた馬は、王府役人や册封使送迎用の御用馬として選抜された琉球馬であり、琉球王府時代（近世琉球）の在来馬の毛色を探るうえで貴重な史資料である。分類した結果は、栗毛が多数を占め、次いで鹿毛となっている。白色馬の月毛、河原毛、芦毛が合わせて 12%も存在する。粕毛と駁毛がそれぞれ 13%も見られるのは特徴的である。少ないが青毛も存在していることから、近世琉球の在来馬（琉球馬）の毛色は多様性に富んでいたのである。

4－2　大正以降における琉球馬の毛色

大正時代に琉球馬の毛色を調査した資料がある。1922(大正 11)年馬政局の佐々田が県内各地を訪問して調べたものである。「毛色は鹿毛最も多く青毛は希なるも栗毛、河原毛、芦毛、月毛、粕毛類を混へ、島尻郡地方は青毛、黒鹿毛を嫌忌し宮古郡地方は其の傾向を認めざるも特に粕毛、河原毛を喜ぶ風あり」（佐々田 1922）。このように大正時代にも琉球馬には、鹿毛や栗毛とともに青毛や月毛、河原毛が存在していたのである。

昭和初期には、大沢(1939) が宮古島と石垣島で調査した記録（表 4）が残っている。

表４．宮古馬、八重山馬の毛色出現頻度

	宮古島平良町	石垣島大浜
栗毛	2　(4%)	12（13%)
鹿毛	38　(72%)	71（74%)
黒鹿毛	3　(6%)	11（11%)
青毛	0	0
河原毛	5　(9%)	2（ 2%)
粕毛（栗）	1　(2%)	0
粕毛（鹿）	4　(7%)	0
計	53　(100%)	96（100%)

（大沢 1939）

表 4 によれば宮古島と石垣島ともに、鹿毛と黒鹿毛の馬が全体の８割を占め、栗毛の馬は１割前後である。そして注目すべきは両島とも青毛と月毛の馬が無くなっていることである。ただ白馬系統がすべて絶滅したのではなく、河原毛が両島に残っていた。

佐々田（1922）が「宮古郡地方は特に粕毛、河原毛を喜ぶ」と指摘したことが数字になって現れている。

4－3　戦後沖縄における琉球馬の毛色

戦後、島嶼型在来馬の毛色については、野澤ら（1965）が「日本在来家畜に関する遺伝学的研究」で詳細な調査結果を発表している。表５では遺伝学的な方法で、表現型と遺伝子型の対応、および青毛遺伝子（a）、栗毛遺伝子（b）、優性希釈遺伝子（D）の形質発現の有無（＋又は－）で分析している。　結果は以下の通り報告されている。

表 5. 琉球諸島における在来馬の毛色　(野沢ら 1965 年)

調査地	青毛(a)		栗毛(b)		河原毛・月毛 (D)	
	＋	－	＋	－	＋	－
与那国島	0	12	55	12	0	67
波照間島	0	1	12	1	0	13
石垣島	0	0	1	0	0	1
黒島	0	0	1	0	0	1
宮古島	0	4	0	4	0	4
計	0	17	69	17	0	86

1）青毛遺伝子（a）と河原毛や月毛を支配する優性希釈遺伝子を（D）を持たない。

2）栗毛遺伝子（b）とその対立遺伝子（B）は共存しているが前者の頻度が高い。

このように 1965 年には青毛、河原毛、月毛の在来馬は絶滅している。栗毛の割合が高くなっているのは、調査した在来馬の 9 割以上が与那国島と波照間島であることが大きく影響している。この時点で宮古馬 4 頭は鹿毛である。次の表 6、7 の宮古馬の毛色と出現頻度では、鹿毛の割合が 1976 年で 57%、2012 年で 68%となっている。

表 6. 宮古馬の毛色と出現頻度 1976

	鹿毛	栗毛	粕毛（鹿）	粕毛(栗)
雄	3 頭		2 頭	
雌	9 頭	4 頭		3 頭
計	12 頭	4 頭	2 頭	3 頭
%	57%	19%	10%	14%

宮古畜産技術員会

表 7. 宮古馬の毛色と出現頻度 2012

	鹿毛	栗毛	計
雄	9 頭	7 頭	16 頭
雌	14 頭	4 頭	18 頭
計	23 頭	11 頭	34 頭
%	68%	32%	

宮古馬保存会

4－4　琉球馬の毛色変遷と全国在来馬の毛色動向

琉球諸島・宮古島の在来馬に関する戦前の史料は、先に示したように冊封使行列絵巻や『球陽』、馬政局時報、大沢の史料などである。戦前の史料と戦後の資料をまとめてみた。

琉球の近世期には栗毛が多数を占め、鹿毛、河原毛と月毛、それに粕毛が存在し、青毛や駁毛も見られるなど多様な毛色であった。そして 1922(大正 11)年、馬政局の佐々田が調査した記録では、鹿毛が栗毛より多数を占め、粕毛の他に少ないながらも河原毛、月毛、青毛は健在であった。しかし 1939（昭和 14）年東京高等農林学校（現東京農工大学農学部）大沢竹次郎教授の宮古島と石垣島の調査（表４）では、栗毛より鹿毛が多数を占め、河原毛の存在は確認するものの、月毛と青毛は消滅している。大正から昭和初期にかけては、宮古馬など在来馬の命運に係わる極めて重大な国策が施行された。それは大正５年施行の馬匹去勢法と昭和 14 年施行の種馬統制法である。いずれも軍馬生産を目的に、馬の大型化をめざしたもので、在来馬の雄の去勢を義務づけ、また国有の種雄馬以外の種付けを禁止した法律である。宮古島では大正 11 年に馬匹去勢法は適用除外区域になったが、その間に於ける宮古馬の生産

表 8. 琉球馬の毛色変遷（調査頭数との割合）

	年度	青毛	栗毛	鹿毛	月毛	河原毛	粕毛	駁毛	研究者　頭数
冊封使乗馬	1756	▽	◎	○	▽	▽	○	○	絵巻　117
琉球馬	1922	▽	○	◎	▽	▽	○	★	佐々田　?
宮古馬	1939	★	▽	◎	★	▽	▽	★	大沢　53
八重山馬	1939	★	○	◎	★	▽	★	★	大沢　96
琉球諸島	1965	★	◎	○	★	★	★	★	野澤　86
宮古馬	1976	★	○	◎	★	★	○	★	技術員会 21
宮古馬	2012	★	○	◎	★	★	★	★	保存会　34

◎：38%以上、○：10~37%、▽：10%以下、★：無し

は停滞した。その後の種馬統制法の適用で、多くの在来馬は雑種化された。

ところが年配の農家のなかには、宮古馬の方が馬耕や駄馬、牽馬に相応しく、大事に飼っていたことにより少数ながら生き残り絶滅を免れた。野澤らの来島した 1963 年には雑種馬が増加していた。1960 年代における沖縄県の在来馬は、多くが与那国島の牧場で飼われ、与那国馬の大半が栗毛（表 5）で、そのため栗毛が県全体では過半数を占めるようになった。

全国の在来馬の状況はどうだろうか。野沢ら(1965)は島嶼型在来馬に加え、これまでの調査された北海道和種、御崎馬、木曽馬の毛色出現頻度をまとめて一覧表をつくっている。表 9 がそれである。

表 9. わが国各在来馬の毛色出現頻度の比較　　（ 野沢ら 1965）

	年	＋青毛（a）	－	＋栗毛（b）	－	＋月毛等(D)	－	
北海道和種	1936	23	37	30	60	8	82	松本(1953)
御崎馬	1950	20	65	4	85	0	89	三村(1953)
木曽馬	1836～68	772	897	237	1,669	165	1,741	江崎ら(1962)
対州馬	1962	30.5	347.5	209	378	1	586	野沢ら(1965)
トカラ馬	1961～63	0	14	45	14	0	89	野沢ら(1965)
島嶼型在来馬	1961～64	0	31	114	31	0	145	野沢ら(1965)
沖縄雑種	1961～64	17	733	1,035	750	21	1,764	野沢ら(1965)

野沢ら(1965)の島嶼型在来馬の毛色出現頻度に対する分析結果を紹介すると「トカラ馬については青毛遺伝子（a）も優性希釈遺伝子（D）も存在せず、従って毛色に関しては鹿毛と栗毛に限られ、しかも雑種馬に比べて栗毛の頻度が高いという点も見逃せない。」と述べている。あわせて産馬改良のなかった喜界島から十数頭導入し長い間、宝島に隔離されたまま世代を重ねたため、遺伝子頻度の固定がおきた可能性があるとも述べている。

対州馬については「毛色において青毛、河原毛、月毛の馬は全体的に少ない」と分析している。対州馬の毛色と表８で示した琉球馬の毛色の変遷と比べてみると、栗毛や鹿毛とともに少数ではあるが青毛や河原毛、月毛が共通し存在していることである。毛色の出現頻度か

らも、宮古馬のルーツが対州馬であることが裏付けできる。

琉球馬の毛色の変化を、琉球王府時代（近世琉球）、大正・昭和初期、戦後・現代と見てきた。琉球馬の多様な毛色は、時代とともに減少してきたことが明らかである。

4－5　琉球馬と韓国済州馬の毛色比較

冊封使行列絵巻から分類した琉球馬の毛色(表３)と韓国済州島の在来馬の毛色を比較した。済州馬の体高は 110～120 ㎝で、琉球馬と同様小型馬てある（野澤. 1970）。

表 10.　琉球馬と韓国済州馬の毛色比較

	調査年	栗毛	鹿毛	月毛	河原毛	芦毛	青毛	粕毛	駁毛	頭　数	調査員
琉球馬	1756	45 38%	27 23%	10 8%	2 2%	2 2%	1 1%	15 13%	15 13%	117 頭 100%	
済州馬	1966～68	492 26%	1082 56%	183(白色毛) 9%			51 3%	88 5%	21 1%	1917 頭 100%	野澤謙 近藤 藤井

資料：琉球馬；冊封使行列絵巻.「甦る琉球王国の輝き」. 県立博物館特別展 2008.

済州馬：野澤謙. 1970. 済州島馬の遺伝子構成とその系統に関する研究. p. 62 表 4

表 10 とともに、済州島を調査した野澤 (1970) の報告は重要である。済州島馬について「青毛馬が明らかに存在するとともに、河原毛、月毛、芦毛ののような白色毛をもつもの、粕毛（roan）や斑（spot）をもつものがいずれもかなりの頭数存在することが注目される」。つまり、斑（spot）の馬を確認したことは、駁毛の存在を意味している。したがって、韓国済州馬と 1756 年の絵巻に見る琉球馬の毛色分布は極めて類似している。筆者は宮古馬のルーツを対州馬と考えている（長濱 2012）が、この冊封使送迎用の琉球馬と韓国済州馬の毛色分布の類似性は、琉球馬や宮古馬のルーツに対州馬とともに韓国済州馬も含まれていることを示唆している。

5　まとめ

本稿では 3 つの点を明らかにした。1 つは飾り馬をモチーフとした南島歌謡から、馬と神の結びつきは奄美大島が古く、次いで沖縄本島になっている。宮古島と八重山諸島は飾り馬と神とは係わりが弱く、人との係わりであることから時代的に新しいと考えられる。こうした飾り馬の移動ルートは、在来馬の渡来経路を反映したものと考えられる。つまり宮古馬は奄美大島から沖縄本島を経由して導入されたことを窺い知ることができた。

2 点目は、宮古島から選ばれた江戸献上馬と関係した動きである。頭数は少ないものの君臣儀礼の品として、王府の御馬担当職である別当や圉師に大事に扱われている。馬術の名門、野國親雲上や真喜屋親雲上は、琉球馬の特徴を活かし名馬を育て上げた。真喜屋親雲上が中型の大和馬を導入しなかったのは、琉球馬の良さを評価していたからであろう。中山王府が江戸献上馬を大義名分にして生産を督励したのは、冊封使送迎用の御用馬を数多く確保した

いとの戦略があったからだと考える。

3 点目は、冊封使の送迎馬である。御用馬として王府に引き取られた宮古馬も数多く含まれていると考える。冊封使行列絵巻で王府側の騎馬が、冊封使側の騎馬より華やかな飾り立てになっている。これは中山王府としての誇りを示していると考える。冊封使の記録から琉球馬の体格は 4 尺（121 ㎝）以上が多かったことも窺える。

宮古馬と与那国馬の毛色は、現在では鹿毛と栗毛に限られている。しかし琉球王府時代の琉球馬は、栗毛や鹿毛、粕毛のほかに青毛や月毛、河原毛、芦毛、駁毛と豊富な遺伝子を持っていた。琉球馬と韓国済州馬の毛色分布が類似していることは、済州馬が対州馬とともに琉球馬や宮古馬のルーツであることを示唆している。

謝辞

遺伝学的な調査データについては、琉球大学の新城明久名誉教授から指導助言を賜った。鹿児島大学の橋口勉名誉教授と西中川駿名誉教授、沖縄県立博物館・美術館の崎原恭子学芸員から在来馬に関する貴重な資料とご教示をいただいた。宮古畜産技術員会元会長の久貝清氏から、馬の毛色分類についてご指導頂いた。宮古島市教育委員会の又吉察補佐、砂川史香学芸員には資料整理などでお世話になった。記して心からお礼申し上げる。

参考文献　50 音順

新垣恒篤．1972．新編風土記．首里城周辺．大同印刷　p.80．p.121.

池宮正治．1984．沖縄市関係おもろ．沖縄市史．第二巻　資料編．文献資料にみる歴史．沖縄市史編集委員会．ぎょうせい．pp.51-57.

梅崎晴光．2012．消えた琉球競馬．幻の名馬ヒコーキ号を追いかけて．ﾎﾞｰﾀﾞｰｲﾝｸ.p.106.

江崎孝三郎・早川純一郎・富田　武・尾藤淳一・野澤　謙・近藤恭司．1962．日本畜産学会報．第 33 巻 4 号．PP．219-220.

大沢竹次郎．1939．（橋口　勉．1980．宮古馬と与那国馬について．日本在来馬の学術調査報告書．日本馬事協会．p.57 より引用）．

小野まさ子．2009．琉球使節の江戸参府行程と行動．1832 儀衛正日記より．琉球使節、江戸へ行く．博物館特別展．沖縄県立博物館・美術館．東洋企画印刷．pp.49-56.

岡田彌一郎．1938．沖縄島の概況．in 日本生物地理学会会報．1938．p.52.

汪楫．1683．（訳注　原田禹雄）．1997．使琉球雑録．榕樹書林．pp.112-113.

球陽研究会．1978．球陽（1745）．沖縄文化史料集成 5:読み下し編．角川書店．p.694.

佐々田伴久．1922．沖縄県の畜産．馬政局事業時報．第 9 号．p.111.

蕭崇業．1579．使琉球録 in 那覇市史資料篇第１巻３．那覇市史編集委員会 1977．に収録.

島村幸一．1992．琉球弧のウタにあらわれた巡行叙事表現．谷川健一・山下欽一編著．南島の文学・民俗・歴史．三一書房．pp.271-286.

徐葆光．1719．（訳注　原田禹雄）．1982．中山伝信録．言叢社．pp.352-353.
田畑英勝・亀井勝信・外間守善編．1979．南島歌謡大成　奄美篇．角川書店 p.41.p.125.
多良間村史編集委員会．1989．多良間村史 第５巻資料編 4 芸能．多良間村．p.483-488.
陳侃．1534．（訳注　原田禹雄）．1995．使琉球録．榕樹社．p.71.
豊見山和行．2009．江戸上りから江戸立へ－琉球使節像の転回－．琉球使節、江戸へ行く．
博物館特別展．沖縄県立博物館・美術館．東洋企画印刷．pp.58-62.
林田重幸．1974．日本在来馬の源流．in 森浩一編．馬．社会思想社．p.228.
中山盛茂．1969．琉球史辞典．文教図書．pp.431-432.
長濱幸男．2012．宮古馬のルーツを探る．宮古島市総合博物館紀要．第 16 号．pp.1-25.
日本馬事協会（公益社団法人）．2011 改訂．馬の毛色及び特徴の記載要領.
野澤　謙．1970．済州島馬の遺伝子構成とその系統に関する考察．在来家畜調査団報告第 4
号．名古屋畜産学研究所．pp.59-68.
野澤　謙・江崎孝三郎・若杉　昇・林田重幸．1965．日本在来家畜に関する遺伝学的研究．1
島嶼型在来馬の遺伝子構成．日畜会報　36：233－241.
野澤　謙．1992．東亜と日本在来馬の起源と系統．日本ウマ科学会雑誌．3:pp.1-18.
平良市史編さん委員会．1987．平良市史．第七巻．資料編 5．民俗歌謡．p.636.
平川信幸・上間常道・仲程香野・田島亜由美編．2008．中国・北京故宮博物館秘蔵、甦る琉
球王国の輝き．沖縄県立博物館・美術館．東洋企画印刷．pp.136-143.
外間守善・玉城政美編．1980．南島歌謡大成　沖縄篇．角川書店　p.243.
外間守善・新里幸昭編．1978．南島歌謡大成　宮古篇．角川書店．pp.379-381.
外間守善・宮良安彦編．1979．南島歌謡大成　八重山篇．角川書店．p.141.p.350.p.452.
町田有弘．1995．牧別当に関する一考察．in 網野善彦編．1995．馬の文化叢書．第 3 巻．
中世－馬と日本史 2．財団法人馬事文化財団．pp.125-143.
真栄平房敬．1997．首里城物語．ひるぎ社．p.131.
宮古島在番記 1780-1894．平良市史第３巻．資料編 1．前近代．平良市史編纂委員会に収録
宮城栄昌．1982．琉球使者の江戸上り．第一書房．pp.35-54.
宮城鷹夫．1978．白装束の女たち．プロゼクト・オーガン出版局．p.176.
山下欽一．2003．南島民間神話の研究．第一書房 p.297-300.
雍正旧記．1727．in 平良市史第 3 巻資料編 1 前近代．平良市史編纂委員会 1981 収録.
与世山親方宮古島規模帳（下地和宏解釈）2010．宮古島市史資料 3．宮古島市教育委員会.
横山　学．1987．琉球国使節渡来の研究．吉川弘文館．pp.423-433．pp.473-511.
吉田新七郎．1926．高嶺　浩．1948．in 林田重幸 1978．日本在来馬の系統に関する研究.
日本中央競馬会．1978．p.58.
李鼎元．1800．（訳注　原田禹雄）．2007．使琉球記．榕樹書林．p-272.
琉球新報社編．1989．新琉球史．近世編（下）．グラビア「琉球人入朝図引」.